



Title	現れと装飾 : メルロ=ポンティとドゥルーズにおける身体性と動物性
Author(s)	ロドリゴ, ピエール; 服部, 李江子
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 221-236
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈翻訳〉

現れと装飾——メルロ＝ポンティとドゥルーズにおける
身体性と動物性

ピエール・ロドリゴ 著
／服部季江子 訳

『差異と反復』におけるジル・ドゥルーズの主要なテーゼの一つは、次のものである。すなわち、通常考えられるところとは逆に、諸差異が生じうるのはあらかじめある類似に基づいてではない。そうではなく、「諸差異だけが類似する」(DR, p.155)。ドゥルーズが付け加えているように、このパラドックスがはつきりするのには、もろもろの物理学的諸力のシステムにおいてであれ、もろもろの精神的動機づけのシステムにおいてであれ、それらの諸力ないし諸動機づけの異なる二つのセリーのカップリングが、「基本的な諸セリーをはみ出すような振幅をもつ強制された運動 (movement force) がそこから生じてくる。そうしたシステム内部における内部共鳴 (resonance interne)」(DR, p.154)を生み出す、ということに注目するときである。今回の講演で私がちょうど問題にしたいのは、その間にある深い差異を認めることに何ら異論はないで

あるような二つの概念的なセリーが共鳴することで生まれる、似たような効果についてである。ここでいう二つのセリーとは、モーリス・メルロ＝ポンティとジル・ドゥルーズが動物性について問題にしたとき、彼らがそれぞれ展開したセリーのことである。なるほど確かに、近代哲学という思考システムの内部において、これら二つの異なる概念的なセリーが共鳴を始めるときの強度 (intensity) は——それを認めようが認めまいが——概念的な諸枠組みの炸裂をもたらした。われわれはそうした以前の諸枠組みにおいては、動物性と関連させて生物の身体的見かけ (appearance) と人間身体の地位を考へることに慣れきっていたのであるのだが。概念的な諸枠組みの炸裂がもたらすもの、それはドゥルーズの用語を引き受けるならば、「強制された運動」にほかならない。そしてこの「強制された運動」の振幅が、身体性と生命に関する新たな着想へ

と現代思想を差し向けるのである。

一 はじめに、メルロー・ポンティにおける動物性の問題を考察しよう。よく知られているように、この動物性の問題は一九四二年の彼の処女作『行動の構造』のうちに、パフロフの反射学に対する批判的議論によつてすでに登場していた。さらに、この問題はコレージュ・ド・フランスでの「自然の概念」講義——この講義は一九五七・五八年、一九五九・六〇年の大学の三学年度にわたつて費やされることになった——において、再び決定的な位置を占めるようになる。この最後の三年間の講義で展開された議論もつ哲學的重要性の概要を示すために、一九五七・五八年の講義から簡潔に二つの引用を引いておこう。

ヴァレリーが言っているように、われわれ各人は「言葉をもつ動物」である。逆も然りなのであつて、動物性とは感覺的世界のロゴスである、と言ふこともできる……すなわち、動物性とは身体化された意味である。(N, p.219)

動物の見かけ (appearance) に関する研究は、それを言語活動 (langage) として理解する場合に面白さを取り戻す。動物たちが互いに姿を見せあうそのやり方において生の神秘を把握することが必要なのだ。(N, p.245)

動物性が「感覺的世界のロゴス」であると主張すること、またこのよ

うにして理性的ないし記号を操る動物、言いかえれば「言葉をもつ動物」としての人間という人間の古典的定義の逆をたどること、これらのことは動物身体がもつている固有の意味作用を介して、じかに動物身体に接近するということである。すなわち、動物身体を——一つ目の引用ではつきりと述べているように——「身体化された意味」とする、ということである。しかし、ここで次の問いが生じる。この身体は何を意味しているのだろうか。この身体は何を表現し、またそれはいかなるやり方によつてなのか。二つ目の引用がこの問いへの回答として役立つだろう。すなわち、動物身体はみずから意味をなすのだが、それは他の動物たちに対して現れること、(paratre) によつて、したがつてそのともに、現れること (出・頭) (con-partition) の働きによつて、さらには、ひとつの動物世界のようなものただなかでのその誇示 (parade) によつて、つまり身体の装飾 (parure) の働きによつてなのである。メルロー・ポンティが付け加えているように、動物身体を探求するわれわれにとつて「生の神秘」が明らかにされるのはまさにそこからである。この動物のともに、現れることというテーマ——これはいずれにせよ『行動の構造』での分析には出てこなかった——には間違いなく難渋する。しかし、上の二つの引用を解釈すれば、メルロー・ポンティは次の二つの事柄を示唆していると言える。(i) 動物身体がみずから、意味をなすということ。言いかえれば、動物身体は真正の意味作用をもつのだが、それは現象としてそうなのであつて、われわれがそれについて考え、それを自分自身に表象する限りでのみそうなる、というのではない。(ii) この動物身体は、それ自身において閉じられてしまうようなモナド的現実性としては意味

をなさないということ。というのも、メルローポンティが「自然の概念」講義でためらうことなく名付けた「間動物性」(interanimalité) (N, p. 247) の地平における、ともに現れることこそが、動物身体の意味を「言語活動として」、いわゆる(ソシユールの「講義」⁽²⁾における意味での)純粋な差異のシステムとして創設するからである。

なぜメルローポンティにおいて、上記のテーマの検討が知覚、サンボリズム、肉といったような核心的な諸問題——これらの問題は確実に、人間、世界、そして究極的には存在 (Dasein) についての哲学的アプローチを完全に刷新するにいたった問題群である——を動員していくことになつたのか、ということをまず理解しようとして分析にとりかかる前に、現象学において動物というテーマ系がどこに出発点を置いていたのかということに立ち戻る必要がある。メルローポンティがこの考察のテーマを引き受けるのは、まずもってフッサール自身からである。より正確には『イデーニ』、『危機』の第三部とその「付論」をなすフッサールの草稿からであり、『知覚の現象学』の執筆中に、メルローポンティはこれらの草稿をルヴァンのフッサール文庫でよく読んでいた。この点に関して、ある一つのテクストがまさしくわれわれの注目に値するのであるが、それというのは『危機』の第六五段落、付論二三を指す。この付論は実に大胆なもので、ここでフッサールは生命に関して真正のアプリオリであるときみなされるものについて分析している。そしてまたそのようなものは、生物学者が生物についての予断なき研究によって発見できる、そしてとりわけ発見すべきものである。フッサールはこの草稿の中で次のように指摘している。

生きることは、一般的に、それ自体原的に与えられている。そしてより固有なやり方では、生物学的なもの、自己理解 (Selbsterständnis des Biologischen) のうちに与えられている。こうした事情はすべての生物学にとつての、さらにその彼方で、それによつてのみ動物が意味を受け取ることが可能になるような共感 (感情移入) に由来するすべての諸形式にとつての導きの糸でもある。ところで、この主観的な「特徴」は、世界のうちで、有機的生、と呼ばれるものにとつても同様に導きの糸であるのだが、しかしながらこの、有機的生、はまだ、その実際に理解可能な、魂 (anima) から、生、をアナロジーにおいて受け取つてはおらず、したがつてまだ自我性 (Ichlichkeit) から、生、を受け取つていないということになる。(K, p. 534)

以上のように書いているのは次のことを意味している。生はみずからを理解する。というのも、ここでフッサールが生物学的なもの、自己理解と名付けるものは、確かに、生の自己・理解 (auto-comprehension) にほかならないからである。——自己・理解とは、もちろん自己についての反省的知の形式をとるものではないのだが、それでもなお、「主観的」であるときみなされるような意味の形式をとるものである。なぜならこの意味は、エゴの全審級が欠如しているときでさえ、つねに、ただちに自己へと結び付けられているからである。このようにして、生のこのアプリオリな水準においては、意味の地平に生き、アナロジー的共感、す

なわち感情移入によつてすべての生物の生の主観性を推論し、導出して
いるのは、われわれ人間ではないことになる。フッサールが明言してい
るように、事情はまったく反対なのであつて、上記のことは、「世界の
うちで、有機的生」と呼ばれるもの」すべてに固有の、あるアプリオ
リな性格なのである。——したがつて、こうした事態が、メルロ・ポン
ティがのちに「生の神秘」と呼ぶことになるものだろう。しかしながら、
『危機』の付論のこのテキストにはさらに驚くべき点があり、それは上
で引用された一節に続く数行下にある註の部分である。以下に示す。

動物に関しては、このアプリオリはもともと所持されているのだ
が、それは共感によつて動物性が実際に感じられているからである。
「…」さらに言えば、動物的環境世界の構造があり、したがつてすべて
の動物はそれ自身の種の、社会的、地平を所持している。——つ
まり、犬の世界では、地平とは、可能な犬の、関係性のうちで犬
に関して開かれた多様性のことである。「…」(われわれについて言
えは) われわれはもともと動物に関して、動物的共・世界 (*tierische
Welt*) の構造——当該の(つまり人間の)種の世界の構造だけで
なく、他の動物たちとそれらの特異な社会性の理解をも含む——と、
動物抜ききの——すなわち事物の——世界の逆・構造等を持つ。ここ
において実質的な動物存在論の出発点が——外からも内からも——
あり、この動物存在論はそれほど貧しくない。

このテキストにははつとさせられる。なるほど確かに、ここにおいて

すでに間動物性のアイデアが始動しているというばかりでなく、さらに
このアイデアは、動物は「世界が貧しい」とするハイデガールのテーゼ
——これは一九二九・三〇年『形而上学の根本諸概念』講義において唱
えられた——に真つ向から対立するものとしての主要な作品をなしても
いる。実際、フッサールがここでなしているように、「実質的な動物存
在論「…」これはそれほど貧しくない」ということを思い起こせば、こ
れは文字通り、ハイデガーとは逆に、生に関してある質料的アプリオリ
の存在を援護することなのである。したがつて、これは生物についても
現象学の厳密に記述的な概念を堅持するということである。そしてこの
概念というのも、もしそれがフッサールによつてその終着点にまで至ら
しめられていたとするならば、この生物についての現象学は、存在と現
存の「存在的・存在論的優位性」というハイデガールの基体だけでなく、
フッサールのな「構成的」超越論的意識の絶対性をも再検討させること
になつていたのであろう。しかし、知られているように事情はまったく異
なつていたのであつて、他の諸問題と同様に、生に関する問題は『危機』
のテキストにおいてやりかけのままになっている。メルロ・ポンティは
この事態をよく心得ていたのであつて、彼は一九五八・五九年の「今日
の哲学」と題された講義の中で、『危機』の付論二三を引き、解釈して
いる。にもかかわらず、メルロ・ポンティはそこから——このようなメ
ルロ・ポンティの解釈は厳密には間違つているのだが——フッサールは
自我性とのアナロジーによつてしか生のアプリオリに気付いていなかつ
たのだろう、という事柄を引き出すのみである。

アナロゴン——これはサルトルの『想像力の問題』においても、またフッサールにおいても不明瞭な概念である。彼は、生、そして有機体は自我性の、アナロゴン、として考えられる、『危機』、生物学についての付論)と言っているのだが。(Notes de cours 1959-1961, p.124)

われわれは、実は事情は(メルロ＝ポンティによる上のような解釈とは)まったく異なることをみた。というのも、たとえフッサールが、われわれを動物に結びつけている感情移入を呼び覚ますことに自身の出発点をおくのだとしても、したがってたとえフッサールが感情移入から出発するのだとしても、それは動物身体性にかかわる問題、より一般的には間動物性にかかわる問題を概念的に取り扱うことによつてアナロジーという視点を乗り越えるためなのである。それについてメルロ＝ポンティがなんと言おうとも、——彼は時おりアイデアの出自を隠してしまう——生物の身体性についての現象学の問題が最も決定的なかたちで現れるのは、まさに『危機』のこのテキストにおいてなのである。では続いて、メルロ＝ポンティ自身へと再び戻ることになろう。

『行動の構造』においては、パプロフに反論し、ゴルトシュタインとポインディクに做らうちで、以下のことが示された。諸生命活動が現象の全体性として考察されるとき、「さまざまな生命活動は必ず一つの意味をもつ。そしてそれらの活動は科学においてでさえ、互いに外的な諸過程の総和としてではなく、いくつかの理念的統一体の時間・空間的展開として定義されている」。さらに、したがって有機体は、「全体とい

うものを知っている意識にとつて意味をもつ全体であつて、自分自身のうちにやすらうものではない」(SC, p.172)。機械人為的系と物理的な質料全体を特徴づける「相関関係の統一」とは対照的に、確かに生きている有機体は常に「意味作用の統一」あるいは「意味による協調」(SC, p.169)を与えるものである。ここで、この統一ないし協調というのは、有機体を知ろうと企てる意識にとつて存在するのだが、しかし、——この点が本質的である——それらはこの意識によつて生み出されるものではない。というのも統一ないし協調はその有機体それ自身に内在しているからである。ゴルトシュタインが巧妙に記しているように、——メルロ＝ポンティははつきりとそれにしたがひ、引用している——「有機体の意味はその存在である」(SC, p.165)。メルロ＝ポンティはさらに続けている。あらゆる有機体がそうであるところのこの意味の統一にはその本質それ自体からして、実体的で実在的なものは何もない。むしろ、この統一は、ある実在的な生ける身体の特異な転調ないしそのスタイルに住まうのである。この意味の統一を「理念的な統一」と名付けようのはこの限りにおいてである。しかしながらここで、理念的統一とは、アリストテレスならば必ず「分割できない」と言うようなものである。というのも、

現象的有機体には、幾つかの意味の中核、幾つかの動物的本質——目標に向かつて歩き、獲物をつかみ、食べ、また障害物を飛び越したり迂回したりする動作——が内在している、つまり、(すでにみたとおり) 反射論による要素的反応からは生じさせることのできな

いような、したがって生物学的科学のア、プ、リ、オ、リ、とも言うべき諸
一が、内在しているのである。(SC, p.170)

したがって、メルロ＝ポンティが「生まれ出ようとしている理解可能性」(SC, p.223)と的確に名付けたところのものを見抜くことができるのは、「理念と存在との見分けがたい合体」として定義される「構造」のこの水準においてなのである。この際立った文句は二つの意味で理解されるべきであろう。すなわち、一方でこの文句は、反射論やまた同様に生氣論とは反対に、有機体の行動の構造的アプローチは、生物の理解可能性——すなわちそれらのわれわれにとつて、理解可能性——の源泉へと至るということを意味している。そして、もう一方では、動物身体性が、——すでにそれ自身によって、内在的な仕方でもたその環境との機能的関係のうちで——すべての生物の存在の理解可能性一般であるところのもの、の構造であり、また理解そのものを提示しているというところを可能にしている。そういうわけで、理解可能性一般のしるしとして知られるような動物が問題にされるときには、メルロ＝ポンティが一九四二年の著作『『行動の構造』』の結びで、ためらうことなく名付けた「志向的生」——このアイデアには、知性たろうとはしないもの、それでもなお意味作用の領域に属するような理解のプランが賭³されている——を正当に呼び起こすことができるのである。しかしながら、メルロ＝ポンティは『行動の構造』の執筆の時期には彼自身が予感していたところの動物的生の志向的構造を実際に記述することはできなかった。つまり、メルロ＝ポンティは『『行動の構造』』の段階では「動物にとつて

の意味をおつた世界というものがいかにして出現するのかということをも具体的に記述することができなかったものであり、このことは彼が、この著作の後ろから二ページ目で、「もし、知覚を、われわれに現実存在を認識させる作用という意味に解するとすれば、今触れた問題は、すべて知覚の問題に帰着する」(SC, p.240)ということをも慧眼にも垣間見ているとしてもやはりそうなのである。(決して実験室的な環境ではない)動物固有の環境のうちでの、その諸知覚的ならびに諸行為的行動を記述するための素材は、確かに、『『行動の構造』』の時期には「メルロ＝ポンティに欠けていた部分であった。同時にまた「当時の」彼に欠けていたのは、そのような記述の素材やまた生物学の諸書物から出発することで、動物世界についての概念を哲学的に解釈することができ、そしてそのようにしてこの世界についての動物の知覚に関して深化された考察に取り組むことができるという可能性であった。[後に]メルロ＝ポンティにそのような素材を与えることになったのは、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルやアドルフ・ポルトマン、コンラート・ローレンツの読解であり、今から見るように、コレージュ・ド・フランスでの「自然の概念」講義は彼らから養分を得ているのである。

二、「動物性、人間身体、そして文化への移行」と題された一九五八・五九年の講義のはじめに、メルロ＝ポンティは次のように述べている。

環世界は、それ自体で実在するものとしての世界とこれこれの生物の世界としての世界との違いを示すものである。「…」ユクスキュ

ルは行動の概念を先取りしている。「彼が主張しているのは」「環世界」について言及されるとき、そこでは心理学的な思索はなされない、ということである。動物が行動する諸々のやり方があるのであって、それらは行動の意味として理解され、読み取られうる。この環世界へと方向づけられた行動的活動は意識が発明される以前に確かに始まっている。(N, p.220)

したがって第一になすべき仕事は、動物身体の環世界に対する関係の起りりと構造を記述することである。というのも、この(動物身体とその環世界との)関係はさまざま知覚的なものであるだろうか？もしそうであるならば、この知覚の意味とはいかなるものだろうか？あるいはむしろ、さまざまな動物のタイプによる環世界の建立の諸度合いや、したがって動物の知覚への到達の諸度合いを考察しなければならないのだろうか？これらの疑問に対して真摯に取り組むためには、環世界のカタゴリの厳密な構築が必要である。というのも、その構築が行動の構造を対象とするすべての反省に真正に先行するものをさえ構成するからである。したがって、コレージュ・ド・フランスでの「自然の概念」講義は一九四二年の処女作『『行動の構造』』をある種回顧的に基礎づける、といえる歩みがとられているのであり、こう言ってよければ、「自然の概念」講義は『行動の構造』での記述のルーツを再び取り押さえるものである。一九五八年に起草された未刊のノートは、この点に関して非常に重要である。というのもなるほど確かに、このノートは非常に明快に、メルロー・ポンティがその当時問題にしていたことをまとめているか

らである。

問題なのは、われわれが見ている動物身体とは、ある実在が、すなわち環世界との交渉が通過する「その一場所であるのかどうか」ということである。この問題に対する答えはいうまでもなくイエスである。しかし動物は環世界というものを知っているのだろうか？動物は、ある機械が自分が作るものに無頓着であるのと同じように、環世界に対して無頓着であるというわけではない。「しかし」「われわれが知っているようにには動物は環世界を知らないであって、ここにおける動物の知(Wissen)を見出し「ねばならない」。それでもやはり、われわれの知覚のうちに全体としてあるように動物が実在すること、動物がみずからを知覚することはまったく異なる。動物はみずからを知覚しているのだろうか。あるいは全体性というものは、われわれの眼前においてしかないのだろうか。ここでは知覚がわれわれからこのディレンマを取り払ってくれるに違いない。すなわち動物は、知る(savoir)という意味においてはみずからを知覚する。それはわれわれの身体とわれわれの世界との知覚的關係という意味において、つまり動物としてのわれわれ固有の知覚という意味においてみずからを知覚するのだ。「環世界が直観されるということ、そして身体・環世界(Leib-Umwelt)の分節が直観されるということは一つの哲学的な解決策を含み、またあらわにされるべき動物の概念を包み込んでいるのである」⁽⁴⁾。

ここでこの上なく強調されているのは次のことである。もし動物とそれを知覚するわれわれの間に感情移入があるのだとすれば、この「共感」は理論的に仮定された動物の先・意識に関して探求されるべきではないし、同様にフッサールが言うような、すべての生き物に固有の「衝動志向性」の地平において探求されるべきでもない。そうではなく、むしろ知覚に関して探求されるべきなのである。⁵⁾したがって、コレージュ・ド・フランスでの「自然の概念」講義がその基盤においてまで確かに『行動の構造』での分析を再解釈するものであること、そしてこの一九四二年の著作の結びで予感されていたように、この基盤とはまさしく知覚のことであるということ、これらのことがはつきりしているのである。しかしながら、メルロー・ポンティが「ここでは知覚がわれわれからこのディレンマを取り払ってくれるに違いない」と強調できたゆえんを明らかにすることがまだ残されている。

すでに述べたように、メルロー・ポンティが記述の素材の大部分を見出すのはユクスキュルの仕事のうちである。メルロー・ポンティはそれらのおかげで、以下の哲学的テーゼに考慮しつつ議論することができた。それによれば、意味の構造的全体性としての動物身体性についてのわれわれの知覚と、この動物がその存在のうちで作動している知覚自身との間にはいかなる二者択一もない。そして、ここにいかなる二者択一「交替可能性」もないのだとすれば、それは、このどちらの場合においても、知覚とは存在へとかかわる関係のことであり、認識の関係ではないというこの本質的な理由によつてである。したがって、動物性を理論的な知というものさしではかることは根本的に間違っている。というのも、そ

の知はやはり動物存在についての最終的な（あるいは最初の）尺度ではないのだし、ましてや人間存在の尺度をなどではないからである。人間に関して言えば、知覚についての存在論的な次元はとりわけ『知覚の現象学』において明るみに出され、またこの仕事は『見えるものと見えなものの』において、「深さ」と「潜在的な存在」としての肉 (chair) という存在論的テーゼの導入によってなおいっそう深められた、ということが知られている。しかし、動物性に関して言えば、メルロー・ポンティがこのコレージュ・ド・フランスの講義をおこなっていた当時には、すべてはまだなされるべきものとして残されている。ここで未解決の問題は次のものである。つまり、動物の知覚によって、いかなる存在の関係が問題になりうるのだろうか？とところで、ユクスキュルは、『動物的世界と人間の世界』にまとめられたいくつかのテクストで、諸動物がそれぞれ自身の世界へと関係するさまざまなあり方について非常に豊かな記述の素材を提供してくれているだけでなく、そのうえそれらの記述を厳密に概念化してもいる。ユクスキュルはそのようにして、クラゲやウニといった調和的な統一性にはしたがっていないように思われる、より反射的な生命的有機体を諸全体性として解釈するために、まずはバウプラン、すなわち「建設設計図」の概念を作り出す。この大胆で強力な理論的試みは、行動についての機械論的アプローチをその土台から崩壊させるものである。なるほど確かに、ユクスキュルは実際に次のように認めているのであつて、メルロー・ポンティはその一節を一九五七・五八年の講義の中で引用し、注釈している。「犬が走るとき、その脚を動かしているのは動物である。[それに対して]ウニが動くときには、その棘が動物

を動かしている」(N, p. 222)。しかし、それでもなお、このウニが「パーツや部分から」構成されているということはありえず、またこの(ウニが複数の棘によって動かされているという)多様性そのものにおいて、このウニは「反射共和国」として解釈されるのでなければならぬ、ということをも主張するのはもつともなことである。この「反射共和国という」文句はユクスキュル自身のものであるが、この文句は、機械論的生物学の因果的把握という図式に認識形而上学の点から反撃する際に、多様性と統一性に関して導入すべき複雑な働きを巧妙に言い表している。このパウ・プランに基づいて、続いてユクスキュルは高等動物の場合における環世界を概念化しており、ここでは環世界は、高等動物にとって互いに結び付けられ安定化した有用な行動の設計図の動物による建設としてあらわれるのである。したがって、すべてはパウ・プランが、人間の認識論的な観点に立ったうえで、動物の生の構成的なパースペクティブになるというようにして生じる。メルロー・ポンティは説のこの点を正確に注釈している。

対象世界は「高等」動物によって、蒸留される。この高等動物は感覚器に与えられる諸所与を分別しながら、精緻な諸行為によってそれらに 대응しているのだが、そういった差異化した反応が可能であるのは、神経系が対象世界(Gegenwelt)への応答(epique)として、すなわち、レプリカ(epique)、コピーとして組み立てられているという理由によつてのみなのである。対象世界と生きている有機体の間には、秩序立て、協調し、解釈するというある調和的な

同化がある。神経系は世界の鏡(Metaphysiegel)である。そこに絶対的な新しさがある。⁽⁶⁾ (N, p. 225)

このような事態は、まさにユクスキュルの二つ目の教唆である。それは、今度は、心的表象作用という觀念論的理論の土台を崩壊させている。なぜなら、高等動物の世界への関係はもはや前・理論的な意識という点からは理解されないというばかりでなく、さらにここで「世界の鏡」とみなされるのは、まさにこの動物の神経系、したがってまさにその身体的器官であるのだ、ということをも示しているからである！言いかえれば、表象作用にはとらえられないこのような環世界の対象世界への内面化は、諸高等動物の水準では原初的な現象なのである。そしてまたそれこそが説明されなければならない当のものなのだ。ここで今度は、この説明が生行為という点からしか与えられないということに気づく。ところで、この段階で、再び機械論のないし生気論的な説明図式に陥らないようにするために決定的に明らかにされていくのは、再び「設計図」のアイデアである。ユクスキュルによって詳細に記述されたダンヤドカリの行動についての大量の分析から、メルロー・ポンティはなるほど基盤的な哲学的結論を引き出すのであるが、それは環世界に関するものと、ユクスキュルが知覚世界——すなわち動物の行為の普遍的地平における、動物によって「知覚された世界」——と名付けた環世界の側面に関するものである。

真の環世界に居合わせているとき、そこにはひとつの生ける設計図

がある。(したがって) 環世界の観念を実体や力の観念から切り離さねばならない。諸々の生き物についての自然的な諸設計図があるのだ。設計図(があるということ)のしるしは、同一の外的条件がさまざまな行動の可能性を引き起こすということである。ヤドカリは同じ対象物(インギンチャク)を異なる目的のために使う。つまり、あるときには貝殻をカモフラージュして魚から身を守るために、またあるときには(インギンチャクを)食すために、そしてまたあるときには貝殻がはがされた場合に貝殻の代用にするために。言いかえれば、ここには文化の始まりがある。動物が自分からもたらすシボル建築術はこのようにして自然のただなかである種の前・文化を規定する。環世界がある目的に向かっていくということはますます少なくなり、記号の解釈がますます増えていく。「…」そのとき、何が繰り広げられているのだろうか? ユクスキュルがいうこの、主体とは何なのだろうか? この動物についての展開、それはあたかも、いかなる船にも関係づけられることのないひとつの純然たる航跡のようである。(N.p.231)

以上のことが最終的に、全体性としての動物に関するわれわれの知覚と動物の自己知覚それ自身が二者択一をなさないということ、そして即自と対自の間に「ディレンマ」がないということをメルローポンティが主張する理由である。人間の場合でも、動物の場合でも、知覚することとは確かに「存在の關係」であり、これは世界のうちへの肉体的な加入をあらわしている(実のところ、この關係が世界への肉体的な加入を含みこ

んでいるがゆえに)。そしてそのことが、要するに、なぜ「動物性は感覺的世界の口ゴスである」(N.p.219)のかの理由でもある。以上のことが、知覚する動物身体についての生物学者の仕事の中に見いだされる諸記述と哲学的かつ批判的に対話することがますます教えてくれることなのである。

二つ目の仕事は、動物の擬態⁽⁷⁾にかかわるもの、またメルローポンティのアドルフ・ポルトマンやコンラート・ローレンツのテーゼとの対話から生じるものである。擬態の諸現象は、高等動物による「世界の鏡」(Weltspiegel)の作り上げに関するユクスキュルのテーゼに基づいて解釈することによって、次のことを裏付けることになる。すなわち、「動物の形態と環境世界との間には、ひとつの類似的な内的な關係を厳密に認めることができる。そしてすべては、ある不分割なもの、つまり二つのもの間にある知覚的關係が存在するがごとく生じる」(N.p.246)ということ、これである。言いかえれば、動物身体の見かけ(appearance)は単にこれこれの状況における、この身体が生存するのに必要な適應を反映しているだけである、というところではないのだ。動物身体の外観はむしろ生の形式に由来する、発明性という疑いえない力を示しているのであって、そしてこの身体は上記のことをなす際に、時には多様な裝飾⁽⁸⁾(parure)の働きによってそれが現れること(paratone)を誇張するといふ豊かさを伴いさえするのである。したがって、擬態の現象に関して次のように結論付けるべきである。

動物はそれが見えるものであるということによって見る。「…」諸動物の間には反射鏡の関係がある。各々は他のものの鏡なのだ。この知覚的關係は種概念に、ある存在論的な価値を再び与えるものである。存在するもの、それは切り離された諸動物ではなく、間動物性なのである。「…」生、それはビシヤーの定義による、死に抵抗する諸機能の調和、ではなく見えるものを独創するひとつの力である。見るものとそれが見るところのもの同一性は間動物性の成分であるように思える。(N, pp.247-248)

私がついさつき、ともに、現われること (con-panion) と名付けた事態と関わるようなこの結論は、ある意味で『危機』においての間動物性についてのフッサールの直観を裏付けるものである。しかし、重要なのは以下の点である。すなわち、この裏付けは厳密に記述的な方法によって、すなわち動物の直接の現象性における意味を探求し、見出すことによって獲得されたことである。したがって、「メルロ＝ポンティが行ってきた」「哲学ではない」ものとの対話という間接的な方法がここで正当性を示すことになる。そしてまたこの方法のおかげでメルロ＝ポンティは、動物の知覚的領域と人間の知覚的領域に親和性があるということを示すための最終的な一歩を踏み出すことが可能であったのだ。コンラート・ローレンツはオオカミの群れの行動についての研究の中で、実際に次のように指摘している。戦いに敗れたオオカミは服従の姿勢をとっていれば、もう敵から襲われることはないのだが、これに対して、このオオカミがこの服従の姿勢をやめるやいなや、彼はふた

たび襲われてしまう。ローレンツはここから慧眼にも次のことを結論付けている。えてして公言されることは反対に、本能というものは、生き延びるために有用な対象物へと向かうというただそれだけの機能を持つのではない。本能はたとえ「対象がない」(objektlos)ときでさえそうなのである。したがって本能はある目的を設定したり、それを達成したりすることにその本質があるのではない。メルロ＝ポンティが述べているように、それはむしろ「有機体の使用ということほとんど見分けがつかないような活動」(N, p.249)なのであり、考えられるのは、この(襲うオオカミと服従するオオカミの)二匹のオオカミの場合のように、「シンボルの機能における本能の発達」(N, p.256)である。われわれはまさに、間動物性についての衝撃的な事例に立ち会っている。というのも、確実に、再度襲うことをやめたオオカミはある身体「すなわち、戦いに敗れたほうの、服従の姿勢をとったオオカミの身体」を知覚しているのであり、さらにこの身体が、固有の身体性があるところのある外的なシンボルとして妥当するひとつの表現的全体性として知覚されている、というふうになっているからだ。メルロ＝ポンティは、ローレンツの読解と平行させつつ、「自然の概念」講義の準備のための未刊のノートの中で上記のことを明らかにしている。

間動物性においては、動物の固有身体たりうるようなある可視的な身体が「その」外的知覚によって捉えられる、ということがある。動物のこの固有身体は不完全なものではなく「すなわち、相互に疎外してしまうような意識のヘーゲルの闘争のようにではなく」、多

様化するものである。動物のふるまいについて分析することは、それ自身では不完全である経験というものを条件づける「以下のような」第一の包囲を際立たせることなのである。ここでこの包囲とは、表象作用ではなく存在の關係として気付かれる、視覚によつて現実化されるものである。意識の闘争は、この下部構造の上になたてられつつ、ある同じ生命性の領域にあらかじめ参与していることのうちに包み込まれたものとして現れる。(ノート [227] および [228] の裏面)

人間と動物に共通のこの生命性という領域は——納得してもらえたと思ふのだが——世界が出現することの領域としての、そしてまた同時に間動物性、さらに間主観性とともに現れること (companion) の領域としての知覚的領域そのものことである。したがつて、メルローポンティが一九五九・六〇年の「自然とロゴス…人間の身体」と題された講義の中で述べているように、次のように結論付けることができる。

人間は(機械論的という意味での)動物性+理性ではない——それゆえに、自分の身体に関わることができるのだ。つまり、理性的であることよりも前に、人間性というのほうもひとつの身体性のことなのである。まずもつて問題なのは、人間性を、身体であることというもうひとつのやり方として把握することである。——もうひとつの実体性としてではなく、透かし見える存在として人間性の出現をみることに、つまり対自を即自としての身体へと押しつけることと

してではなく、間存在 (interêtre) として「の人間性の出現をみる」ことなのである」。(N. p. 269)

結局のところフッサールの感情移入は、このように「間存在」の概念を介することによつて、真に存在論的な意味の深みのうちに含まれることになる。もちろん、メルローポンティがさらに付け加えているように、「対象としての身体に降りてくるような意識とは何の關係もな」(N. p. 271)。それとは逆に、この結合された存在の様式——すなわち、人間身体の可視性と動物身体の可視性が根本的に絡みあっているということを見えないうちに可能にする「間存在」は、——疑う人もいるだろうが——存在の第一の「エレメント」としての肉と大きく関係しているのだ。メルローポンティは一九五九・六〇年の講義のうちで控え目に記しているのであるが、「ここで非常に重要なのは、「ひとつの」肉の理論」である。

三、われわれはここまで、メルローポンティの分析によつて開示された道筋のいくつかを探索してきたのであるが、ここで分析の対象となっていたのは、動物身体性、動物が現象的に現われること (partie) 、そしてまた動物がわれわれやわれわれと似たような存在の眼前にともに現れること (com-parité) 、さらには(動物身体)の裝飾 (parure) の働き、これらのことであつた。そしてこの歩みによつて、われわれはとりわけはっきりと、概念のあるトリアーデ——これは知覚する存在としての諸々の生物に関する現象学的研究において核心的な役割を担う——

を設定するに至った。このトリアーデ、それはすなわち、世界、プラン(plan)、肉である。私はこの発表のはじめに次のように述べた——(メルロ＝ポンティの)概念のこの配置が——最大の差異のただなかで——ジル・ドゥルーズの思考に際立つた反響を生じさせることになった。そしてまたこの「メルロ＝ポンティとドゥルーズのセリーの」共鳴によって真の「強制された運動」が生じ、時代は生に関しての別の哲学へと向けられる、と。「しかし」、この点に関しては議論を展覧させる時間がほとんどなくなってしまったことをお許し願いたい。それゆえ、ここでは私の論の要点のみを概括させていただこう。

まず最も重要なのは次の点を指摘することである。一九九一年のフェリックス・ガタリとの共著『哲学とは何か』という晩年の仕事の中で、ドゥルーズは、世界、科学、そして芸術についての現象学的アプローチに対して強く異議を唱えた。おそらく、この本ほどドゥルーズのメルロ＝ポンティに対する学説上の相違がはつきりと露呈しているものはほかにないだろう。そしてこの相違はとりわけ芸術の問題に関してよくあらわれている。ここでおそらく、あの有名な文句と断定が思い出されることだろう。すなわち、「肉は柔らかすぎる」(Op. p. 109)。そして、「芸術は、おそらく、動物とともに始まる。少なくとも、テリトリリーを裁断し家を作る動物とともに始まる」(Op. p. 174)。そのついで目論まれているのは、メルロ＝ポンティが知覚に認めた優位性に打撃を与えることであるのだが、それというのも、「ドゥルーズが」感覚に、あるいはより正確にいえば、生物学的有機体の触発＝情動(affection)へと還元することができない「感覚ブロック」として考えられるところの「被知覚態」に絶対

的優位性を与えるためなのである。ドゥルーズとガタリはこの意味で、次のように記述している。「芸術が目指していることは、対象知覚から、そして知覚主体の諸状態から被知覚態を引き離すことであり、… 感覚のプロックを、純然たる感覚存在を抽出することである」(Op. p. 158)。芸術家は、人間と非人間が決定不可能な領域で、すなわち「生の原始的な沼地」(Op. p. 156)で出会い、創造する。もちろん、ここで念頭に置かなければならないのは以下のことがらである。すなわち、ドゥルーズによるフランシス・ベーコンの絵画についての見事な分析、そしてそれにより劣らず際立つ彼のライト・モチーフ、「獣肉に憐れみを——」(Pie pour la viande)、さらには、とりわけ「器官なき身体」という反・現象学的なモチーフ——ドゥルーズはこのモチーフをアントナン・アルトーから引き受けている——、これらである。しかし、私が特にとり上げたいのは、ドゥルーズがメルロ＝ポンティの現象学に対して論争を繰り広げるまさにその中心部において、ドゥルーズとガタリの作品が、概念の同じトリアーデの「メルロ＝ポンティとの」反響を響かせている(確かにこのやり方は乱暴でちぐはぐではあるのだが)ということである。ドゥルーズのトリアーデ、それはすなわち、肉、平面(plan)、世界ないし宇宙である。もうお分かりだろうが、「この二つのトリアーデは」すべてが異なっている。すなわち、肉は、ここでは、「感覚ブロック」としての被知覚態たりうるには「柔らかすぎる」。したがって肉は、テリトリリーにおける家といった諸形式の功利的な組織を超えて知覚的現出を構造化する諸「部分面(part)」や諸平面によってフレーミングされ、保たれるのであればならない——ドゥルーズとガタリはオーストラリアのある鳥の例

を引いている。この鳥は歌う前に、木の葉で一種の舞台をつくる、そして、

その真上で、蔓や小枝にとまって、くちばしの下に生えている羽根
毛の黄色い付け根をむき出しにしながら、ある複雑な歌を、すなわ
ち彼自身の音色と、彼が、その間、断続的に模倣する他の鳥の音色
によって合成された歌を歌う——彼は完璧に芸術家である。一個の
芸術作品全体の下書きをなすものは、肉のただ中における共感覚で
はなく、テリトリーの中の諸感覚のプロック、すなわち「これらの」
色、姿勢、そして音である。(Op. pp. 174-175)

ここで次のことがわかるだろう。間動物性のアイデアは上の記述とそ
れほどかけ離れたものではない。それというの上の記述は、ドゥルー
ズが現象学を批判するのは対照的に、この鳥が、「ほかの鳥の歌の」
真似をし、みずからをあでやかに飾り立てていることを強調しつつ、ま
たその動物のそして間動物の世界への開かれをも示すものであるか
らだ。こういった状況であるから、われわれ——ドゥルーズ、メルロー
ポンティ、そして彼らの対決のいささか困惑した後継者としてのわれわ
れ——にとつていちばん重要な点は、おそらく(それをわれわれが喜ぶ
としても、あるいはわれわれがそれに憤るとしても) 次のことを言い立
てることではないだろう。すなわちそれは、ドゥルーズが、「互いに交
換されうる相関項としての、世界の肉と身体(の肉)——アイデア的合致」を
呼び起こさせ、そしてまた彼が「現象学(の最後の転身に息を吹き込
んでいるのは、ある奇妙な「肉主義」であり、それゆえに、現象学は(キ

リスト教の) 受肉の秘儀のなかに陥っている」(Op. p. 169) と皮肉を込
めて付け加えるのを見て、ドゥルーズがメルローポンティのトリアーデ
を安易に戯画化しているのだと考えること、これである。ドゥルーズの
攻撃は、明らかに肉に固有の、すなわち肉の「くぼんだ存在」あるいは「問
いかけの存在」の存在論的次元をあまりに軽視するものである。要する
にドゥルーズの攻撃は、肉を「アイデア的一致」として語ることを禁じて
いるところの、切迫という中心概念をなかつたことになってしまってい
るのだ。しかしながら、もつとも重要なものは、——私が述べてきたように
——両者の論を根本的に差異化しようとするところにあるのではない。重
要なのは、共鳴の作用のうちで見出だされるのだ、ということである。
すなわち、まさに差異化する二つの概念のセリー——メルローポンティ
における世界、プラン(plan)、肉と、ドゥルーズにおける肉、平面(plan)、
宇宙——が現代にもたらしたあの共鳴のうちで。そしてまさにこの共鳴
の作用こそが、今日、この想像も及ばないほどの広がりをもつ強制され
た運動によって、生についての別の思考へと、したがって動物と人間に
ついての別の思考へとわれわれを駆り立てるのである。

註

- (1) 【訳注】動物学用語。交尾の前の儀式的な求愛活動を表わす。
- (2) 【訳注】『一般言語学講義』を指すと思われる。
- (3) 【訳注】本論中に plan という語は幾度か使われている。フランス語の plan
には (i) 「計画、設計、構想」、(ii) 「面、平面」の意がある。訳出に際

してはその都度文意に即した。ユクスキユルの文脈では「設計図」（『生物から見た世界』参照）、ドウルーズの文脈では「平面」（『哲学とは何か』参照）としている。メルロ＝ポンティの文脈では、それら二つの意のどちらにも決めかねたため、フランス語の語感を生かし「プラン」としてゐる。

(4) 一九五八年の未刊のノート (Fonds B.N. 第八巻)。「一九五九・六〇年の草稿集。ノートNo.201左ページ参照」(マイクロフィルムではBN.9852とある) 私はパトリック・ルコント氏に感謝する。氏はこれらのマイクロフィルムを転写し、非常に快く私にそれらの内容を届けてくれた。

(5) 一九五八年の未刊のノートでは次のようになってゐる。「われわれが動物の行動にとりいれるもの、それは一つの意識・でも、したがって一つの対象・でもない。——それは一つのパスベクティヴであり、すなわちそれは、知覚的領域、われわれのものと同様に有限でそしてわれわれのもの以上に有限な領域、世界への挿入と同義であり、それゆえに動物にとって私的な対象から構成されているのではない領域なのである。」(ノートNo.213)

(6) 【訳註】この部分のメルロ＝ポンティからの引用の訳出にあたり、加國尚志『自然の現象学』を参照した。

(7) 【訳註】毒を持つ動物に外見を似せたり、保護色によって外敵からのがれる現象。

(8) 特定の動物——特にオウムのような鳥——の見た目の美しさについてのアドルフ・ホルトマンの仕事、ならびにJ.C.ジヤンの『イメージの力』(P.Rodorigo et J.-C. Gens, Dijon, E.U.D., 2007, pp.241-252) におけるこの問題——「生物の形態的現われがもつスタイルの力」——についての刺激的な研究を参照せよ。

(9) 【訳註】ジル・ドゥルーズ、『感覚の論理』、二四頁

引用文献

Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, 1968, (略記 DR)

Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, 1991 (略記 GP)

Maurice Merleau-Ponty, *La structure de la conscience*, 1942 (略記 SC)

La nature : notes, cours du Collège de France : suivi des Résumés de cours

correspondants de Maurice Merleau-Ponty, 1994, établi et annoté par Dominique

Séglar (略記 N)

Notes des cours au Collège de France, 1958-1859 et 1960-1961, 1996, préface de

Claude Lefort; texte établi par Stéphanie

なお、訳出に際して以下の翻訳書ならびに研究書を参照した。

ジル・ドゥルーズ、『差異と反復』(二〇〇七、財津理訳、河出書房新社)

、『感覚の論理——画家フランシス・ベーコン論』(二〇〇四、山縣照訳、

法政大学出版局)

モーリス・メルロ＝ポンティ、『行動の構造』(一九六八、滝浦静雄、木田元訳、

みすず書房)

、『見えるものと見えないもの』(一九八九、滝浦静雄、木田元訳、みすず書房)

、*Nature : notes, cours du Collège de France, 2003*, Northwestern University

Press.

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、『哲学とは何か』(一九九七、財津理訳、

河出書房新社)

ヤーコプ・フォン・ユクスキュル、『生物から見た世界』(二〇〇五、日高敏隆、

羽田節子訳、岩波文庫)

加國尚志、『自然の現象学』(二〇〇二、晃洋書房)